

平成26年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

<p>本校の校是である『自彊の精神』を培い、未来を切り拓く創造的な思考力とたくましく生きる力を身につけ、グローバル社会をリードできる人材を輩出する学校をめざす。</p> <p>1. 全日制普通科単位制という学びのシステムを活用して、将来大学や社会などで伸びる生徒を育てる。</p> <p>①知識基盤社会を生き抜く学力を確実に身につけるとともに、幅広い教養（リベラル・アーツ）を備え、主体的に学ぶ力を育成する。</p> <p>②高い志を掲げ、グローバルな視野に立って行動できる資質と能力を養う。</p> <p>③自主活動や特別活動など学校の様々な教育活動を通じて、自主・自立の精神を培うとともに、社会人基礎力を育成する。</p> <p>2. 生徒に対する教育力を高めるため、教職員が常に真摯に研鑽と修養に努めるとともに、互いに情報の共有化を図り、連携を密にして教育活動に組織的に取り組む。</p> <p>※『自彊の精神』（自らつとめて、たゆまぬ努力を怠らない精神）</p> <p>「天行健なり 君子は自彊して息まず」（出典「易経」）</p>

2 中期的目標

<p>1 知識基盤社会を生き抜く学力を確実に身につけるとともに、主体的に学ぶ力を育成するための取り組み</p> <p>(1) 学習に主体的に取り組む姿勢を徹底させるとともに、3年間を通じた計画的な学力の向上に努める。</p> <p>ア 卒業時から遡って3年間の教育プログラムをつくる。</p> <p>イ 授業を主体的に受ける態度等を年度当初のガイダンスや日々の授業において徹底する。</p> <p>ウ 家庭で予習、復習などの学習にしっかりと取り組ませる。 (授業以外の平均学習時間：1年生(120分)、2年生(150分)、3年生(180分)を目標値とする)</p> <p>エ 週休日の部活動のあり方などを工夫することにより、部活動と勉学の両立を図る。</p> <p>オ 組織的な講習体制を構築するとともに、生徒の参加を促す取り組みを進める。</p> <p>カ 各教科で課題研究等の取り組みを進め、生徒が主体的に学習に取り組み、その成果を発表できる機会を設けるなど、課題解決能力やプレゼンテーション力を育成する。</p> <p>2 生徒が高い志を持ち、より高い進路希望を実現するための取り組み</p> <p>(1) 生徒の国公立大学への志望を実現するための取り組みを進め、国公立大学現役合格者50名以上をめざす。</p> <p>ア 卒業までの3年間を見据えた「進路ストーリー」を活用し、自立した進路選択ができるようガイダンス機能を強化し、系統的な進路指導を実施する。</p> <p>イ 進路検討会を有効に活用して、きめ細かい指導により高い志望を最後まで維持させる。(センター試験5教科型受験者数160名以上)</p> <p>ウ 生徒が進路について深く考え、高い進路意識を持てるよう、大学や職業について考える機会を「総合的な学習の時間」や特別活動等を活用して体系化する。</p> <p>3 国際的視野に立って行動できる人材の育成</p> <p>(1) グローバル化が進む社会で活躍する人材の育成のために、異文化交流の機会を増やし、国際交流を推進する。</p> <p>(2) 文部科学省「教育研究開発事業(外国語関係)」の取組みと成果を継承するため、学校独自の後継事業を推進し、英語によるコミュニケーション能力の向上に努める。</p> <p>(3) ユネスコスクールへの加盟を通して、生徒が地球規模の諸問題を考え行動できる態度をはぐくむことができるよう、新しい教育内容や手法の開発、発展をめざす。</p> <p>4 教職員の授業力や指導力の向上のための取り組み</p> <p>(1) 生徒が主体的に学ぶことのできる授業をめざして、教職員の授業力の組織的向上を図る。</p> <p>ア 授業アンケートの実施を受けて常に授業を点検し、ICTの活用で授業の効率化を図りアクティブラーニングの手法を取り入れ、授業改善や指導力の向上に取り組めるよう、授業改善システムを有効に機能させる</p> <p>イ 公開授業、研究授業、互見授業、学力向上に向けての研修を効果的に設定するとともに、授業についての意見交換が活発に行えるような環境を醸成し、教職員が意欲的に授業研究に取り組めるように努める。</p> <p>(2) 生徒と密に関わり、信頼関係を構築するために教育相談体制や生徒指導体制を整備し、生徒の情報の共有化や連携を密にして、教職員の組織的な指導力の向上を図る。</p>
--

【学校教育自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [平成26年12月実施分]	学校協議会からの意見
<p>本年度は、学校教育自己診断の項目を大きく変更した結果、昨年度と違った傾向がみられた。生徒・保護者の満足度は、それぞれ90%、90.6%と極めて高い状況である。また、生徒の自主活動の充実を示す設問においても、80%以上の肯定感があり、本校の強みとなっている。教職員・生徒・保護者の三者を比較した場合、全体的傾向として教職員の肯定感が高くなっている(生徒70.1%、保護者68.3%、教職員84.3%)。三者とも肯定感が低い項目が、「社会のリーダーから学ぶ機会が多い」(生徒56.8%、保護者50.9%、教職員66.7%)「これまでの進路実績に満足している」(生徒55%、保護者42.6%、教職員46.4%)「部活動と勉強が両立している」(生徒52%、保護者46.5%、教職員57.9%)という項目であり、本校の今後の課題を示している。生徒・保護者が低く、教職員が高い項目として「本校の学習だけで、進路達成に必要な学力が身につく」がある(生徒52.4%、保護者29.9%、教職員77.2%)。この認識の差は大きく、学校全体として真摯に受け止めていく必要がある。また、進路関連の具体的な項目についても教職員の肯定感程、生徒・保護者の肯定感は高くない。特に「大学生等の卒業生の話を聞く機会が多い。」については、教職員78.9%に対して、生徒48.8%、保護者31.5%とかなりの差となっており、卒業生・大学生を活用したキャリア教育の実践が課題となっている。</p>	<p>第1回(5/28)</p> <p>学校側から今年度の学校経営計画について説明を行った。</p> <p>協議としては、①進学実績向上への期待②部活と勉強の両立についての期待が挙げられた</p> <p>第2回(11/21)</p> <p>学校側から進捗状況について報告を行った。</p> <p>協議としては①アクティブラーニングの実践についてどのような成果が生まれているか、ICT機器の活用についてどのように実践されているか</p> <p>②部活と勉強の両立の課題について、携帯・スマホ問題について解決の必要性が提言された。</p> <p>第3回(2/6)</p> <p>学校側から今年度の活動報告を行った。</p> <p>協議としては①アクティブラーニングの成果について、生徒の学力の底上げになっているかという質問があった。②部活と勉強に両立については、今回のアンケートの実施が、生徒が考えるきっかけになって欲しいという意見がなされた。またグローバル社会を生きていく上において話せる英語教育の充実の要望があった。③保護者に対してもっと情報提供を小まめに行った方がよいのではないかという意見を頂いた。④生徒の勉強のスタイルが変わってきているので、学習室の充実が重要であるという意見を頂いた。</p>

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1 主体的に学ぶ力を育成するための取組	(1) 主体的に学ぶ力の育成を進めるための取組	(1) ア a) 3年間の学力向上プログラム（H25年度策定）を実効あるものに具現化していく。特にスタート時プログラムの核となる1年学習ガイダンス 『学びの一日』で早い段階での動機づけと「勉強の仕方」を習得させ、できる！という自信と展望を持たせる。 b) 3年間の学力向上プログラムの趣旨を受け教科ごとの3年間の学力向上プログラムを策定する。	ア a) 『学びの一日』終了後アンケートで、「勉強の仕方がわかった」「3年間どのように取組めばよいかわかった」等の回答80%以上 b) 教科ごとの3年間プログラムを学校Webページで公開	ア a) 学習ガイダンスデーのアンケート結果では「全ての教科に積極的に参加できた」46%、「学校と違う場所なので新鮮な気持ちで参加できた」57%、「苦手な教科、嫌いな教科は積極的に参加できなかった」23%で、初めて実施された学習ガイダンスデーに肯定的な評価がなされている。一方で「学びの一日」アンケートからは十分な結果を得るまでには至らなかった。今後は、今年度の取組を踏まえ、さらに内容の充実と継続的な指導が重要となる。(○) b) 各教科で学びMAPを作成。今後は、生徒への還元及び課題の量などの教科間調整が課題になる(○)
	ア 学力向上プログラムの効果的実行			
	イ 学習時間の伸張	イ a) H25年度のデータ分析より入学後3カ月こそ「黄金の期間」であり「魔の期間」であることを再度全体で確認し、「学習時間調査」を生徒の気づきや自覚を促すポイントとして活用する。自律的に学び続ける力を習得するツールとしてオリジナル「スケジュール帳」への記入等具体策を導入する。 b) 学習と部活動との両立について、部顧問、担任、学年等が個々の生徒の「定期考査」や「学力生活実態調査」の結果、授業態度や提出物の状況を共有し、協力しながら改善策を考える『検討会』を設定、その結果9月の「学力生活実態調査」（1・2年）で改善が見られない場合は、NEXT委員会と具体的な方針を考える。	イ a) 全学年、学習時間の伸び前年度比10分増を目標とする b) 学校教育自己診断「部活動を行っていても学習時間は確保できている」前年度比5%増（昨年度67.4%）を目標とする	イ a) 昨年度と調査時期は異なるが、スタディサポート第2回を比較すると平日の学習時間が68期生（1年次1時間9分⇒2年次1時間）69期生（4月56分⇒1時間2分）となっており、目標に達しているとは言い難い。(△) b) 同様の趣旨の項目の生徒の肯定感は、52%であり、設問表現は違うものの大幅な減になっており、本校における重要な課題の一つとなっている。今年度「部活と勉強の両立に関する意向調査」を実施し、1・2年生を中心に現在の生活を見直し、勉強との両立を図る問題提起を行った。今後各クラブの実情に合わせて検討を重ねていく事になる。(△)
	ウ 講習等サポート体制の組織化	ウ NEXT委員会と学習指導部が連携し、3年間のサポート計画（講習実施計画）を作成、学校全体として講習に取組む。	ウ 学校教育自己診断「学校は放課後・土曜・長期休業中に講習を十分に行っている」生徒肯定的回答を前年度比5%増（昨年度79.6%）を目標とする	ウ 同様の項目が77.6%の肯定感であり、ほぼ前年度並みとなっている。長期休業中の講習・補習については、1年から3年まで十分に充実している。今後土曜日の講習・補習の充実が課題である。同様の項目の保護者の肯定感は、45%と生徒に比してかなり低い。今後、保護者向けの案内の充実を行い、学校・保護者両サイドから受講促進を行う事が重要である。(○)
	エ 探求的な学びの進化	エ 「総合学習」等の3年間プログラムを通して、探究型、課題解決型の学びを進め、自ら考え、発表できる力を育成する。	エ 発表・プレゼン等の公開、外部での発表等。	エ 1年次の総合的な学習の時間で防災をテーマに各クラスでの発表、学年全体でのプレゼン実施。2月の国際・人権課題でも同様の発表が予定されている。(○)
オ 読書活動の推進	オ 知的世界を広げ、学力の基盤となる読書活動の更なる推進。今年度からは、8:25～8:35を「ゼロ時間目」と位置づけて行う。授業や総合学習と連携しながら、学校全体として読書活動を推進する。	オ・生徒一人ひとりの読書数を増やす（年間10冊以上読む生徒1・2年生の50%以上） ・外部の感想文、小論文等コンクールへの応募	オ 朝の読書について「とても頑張っている」「頑張っている」と答えた生徒が81.1%。6月段階で1冊から5冊借りた生徒が89%、5冊から10冊借りた生徒が7.2%である。「本に関心を持つようになった」（34.4%）「文字を読むのが楽しくなった」（31.7%）と肯定的に取り組んでいる生徒が増加している。年間10冊以上読んだ生徒が全体の2.5%で目標には達していないが、昨年度よりは4ポイント増加している。(○)	

府立市岡高等学校

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">2 高い志を育む取組</p>	<p>(1) 高い志を育むプログラムづくり</p> <p>(2) 高い進路実現のための方針と指導ノウハウの共有化、実行による「あきらめさせない」指導</p>	<p>ア さまざまな分野で頑張る人との「出会い」から生き方を考え、世界を知り、大学での専門的な学びに触れて高い志を育むような取組みを「総合学習」とリンクさせながら実行する。</p> <p>イ a) 指導体制 学力生活実態調査、模試、教育産業による学力分析システムを活用した進路検討会で生徒の状況を全体で把握し、的確な指導で進路実現に導くノウハウを全体で共有化する。職員会議等でもそのための時間を十分に確保する。</p> <p>b) 広い情報提供とあきらめさせない指導 ・志望大学の決定については主体性をたいせつにしつつ、生徒・保護者に地方の国公立大学の魅力についても積極的に情報提供を行う ・「あきらめさせない指導」として、3年次12月からの講習、センター受験後の2次に向けての講習や個人指導等に力を注ぐことで生徒を最後まで頑張らせる。</p>	<p>イ a) 3年次での「進路検討会」5回以上実施</p> <p>b) 3年次12月以降のセンター直前講習、センター後の2次対策講習をすべての主要科目で実施</p>	<p>ア 学校教育自己診断で「将来の進路や生き方について考える機会がある。」という肯定感が83.3%と高い結果であるが、具体的な項目になると肯定感が下がる傾向にある。特に「大学生等の卒業生のお話を聞く機会が多い」の項目は48.8%となっており、今後の進路指導の内容充実が課題である。(○)</p> <p>学力生活実態調査、模試、教育産業による学力分析システムを活用した進路検討会が5回開催されている。また、教育産業が提供する進学情報に対して教職員が前年以上に積極的に参加し、そのノウハウを共有している。今後は、模試の分析会を各教科で実施し、教科での指導力の向上が課題になる。(○)</p> <p>2 学年での地方大学の校内説明会の開催、2月には保護者向けの地方国公立大学の魅力を示す説明会の開催を予定。(○)</p> <p>3 年生のセンター出願が、単位制移行後過去最高を記録すると同時に国公立型出願の割合も同様に過去最高。国公立合格者数〇〇人で大幅増となった。(◎)</p>
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">3 国際的な視野と地域や社会を生きる力の育成</p>	<p>(1) 「ユネスコスクール」としてすべての教育活動を通じたESD(持続可能な社会の発展のための教育)の取組みを通じた世界、地域、社会の課題について考え発信していく力の育成</p> <p>ア 国際交流の更なる推進</p> <p>イ 防災等地域と繋がり、社会について考える学びの推進</p>	<p>(1) ア 国際交流の更なる推進 ・米国ケント市の2高校との短期交換留学の更なる充実 ・海外の学校との交流機会の積極的導入 ・他の短期留学機会の紹介・奨励等を通して世界を知り、チャレンジ精神やコミュニケーション力、英語学習へのモチベーションを高める。</p> <p>イ 防災等地域と繋がり、社会について考える学びを以下の学習活動を通して推進する ・「総合学習」の活用 ・授業でのプレゼンや発表の機会の積極的導入(英語含む) ・以前から行ってきたボランティア活動を含めたユネスコスクールとしての活動と発信 ・地域と繋がる防災教育の推進と体系化</p>	<p>(1) ア・ケント市以外の海外高校生等の受入交流2回以上</p> <p>・ESD(持続可能な社会の発展のための教育)の実践に向けOSAKA ASPnet加盟校としてユネスコ国際大会の運営に参加</p> <p>イ・地域と繋がる実践3回以上行う</p>	<p>春に台湾から武陵中等学校の1日交流を実施、オーストラリアからの留学生を1年間受け入れ、国際交流の推進を図った。例年行っている米国ケント市からの交流も3月・7月に実施し、海外からの交流の機会を積極的に導入している。(○)</p> <p>ユネスコ国際大会については、積極的に取り組む生徒が十分でなかったため、参加できなかった。次年度に向けた大きな課題である。(△)</p> <p>1年次の総合学習で取り組んだ防災教育で、地元港区のフィールドワーク、滋賀大学の教授を招いての保護者向け講演会、防災コーディネーター、西大阪治水事務所を招いての防災エッセイ発表会、国際・人権にかかわる班別活動の実施を行っている。(◎)</p>
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">4 指導力と協働体制の向上</p>	<p>(1) 授業力の向上</p> <p>(2) 生徒の心の悩みに素早く対応できる資質の向上と相談体制の確立</p> <p>(3) 市岡高校としての規律・マナーの向上に向けての一致した指導体制づくり</p> <p>(4) 積極的な情報発信・広報活動の展開</p>	<p>(1) 年2回の生徒による授業評価アンケートと研修、教科会議、研究公開授業・互見授業を組み入れた授業改善システムを昨年以上に有効に機能させ組織的な授業力向上を図る。</p> <p>(2) 日常的に個々の生徒の状況を共有するとともに、生徒の心の悩みに素早い対応のできる知識と感性を磨いていく。 ・スマホ・ネット等SNSツールのリテラシーについての研修を実施する。</p> <p>(3) 規律やマナーについて一致した声かけを行う。 一昨年37%減、昨年15%減と遅刻数を減らしてきた。26年度は始業時間を10分早めるが、生徒と教員が心を合わせて規律ある学校づくりを進める。</p> <p>(4) 25年度新設した「企画広報部」のリーダーシップの下、学校主催の説明会の時期回数と内容、Webページの更なる改善などを行う。すべてのことを学校全体として組織的に取り組んでいく。</p>	<p>・生徒による授業アンケートでめざす授業像で共有した「主体的に学ぶことのできる授業」の項目で1回目より2回目のポイントを5%上げる</p> <p>・学校教育自己診断「学校には気軽に相談できる先生がいる」肯定的回答60%以上</p> <p>・25年度年間遅刻総数(2366人：前年度比15%減)より更に10%減らす</p>	<p>授業アンケートで第1回から第2回の伸び率が、7.45ポイント。各教科における最大ポイントの平均と最少ポイントの差の平均が、6.54ポイントから6.23ポイントに減少し、各教科で質の高い授業が提供される方向に向いている。ただし、主体的に学ぶポイントが2.1%減少している(○)</p> <p>左記のアンケート項目で肯定感が49.1%となっており、日常的な生徒との距離感については課題がある(△)</p> <p>(3) 26年度遅刻総数2766人で、前年度比17%増となった。今年度より朝読書の時間を本格的に開始し、始業時間を5分早めたことも遠因する。(△)</p> <p>(4) 今年度も全教職員による中学校訪問、学校説明会を年4回実施。外部の説明会にも多数の教職員が関わることで学校の広報活動を展開した。また、新パンフレット作成に向けて首席を中心に若手教員が作成に参画している。今後ホームページの充実が課題となる。(○)</p>